

1983年12月3日(昭和58年) ニッセル先生の日本滞り
英語学科創立25周年記念) スル子原稿
SELDA設立総会

上智大学英語学科25周年に寄せて

本日は英語学科に関係の深い先生方及び卒業生の方たちを、こうしてお迎えすることができ、大変うれしく思います。又、この英語学科の25周年記念式典のためにわざわざご出席くださいました理事長及び外国語学部と他の学部の先生方に、心からお礼を申し上げます。

さて、25年と言いましても、上智の70年の歴史に比べればそれほど長いとは言えません。英語学科の卒業生はこれまで約3千人です。しかし、現在、世界中のイエズス会の学校には150万人の学生が在籍しています。これを思えば英語学科卒業生は決して多いとは言えないでしょう。しかし重要なのは数ではなく、人間の“Quality”であります。

我々は上智の歴史を非常に誇りに思っています。かつて、この上智に種を蒔き、耕してくれた先駆者たちの努力の上に私たちが立っていることを忘れてはなりません。私たちはともすると、こうした方たちの苦勞を忘れて、自分たちの力でここまで来たと思いがちです。しかし、私たちが今日あるのは、こうした方たちのお蔭なのです。

外国語学部は、ある理想のもとに創設されました。その理想とは、いろいろな仕事を通じて社会のために貢献できる人材を育てるということです。野口先生は、私たち英語学科の最初の学科長でしたが、その素晴らしい指導力で学科を率いてくださいました。先生は英語学科の卒業生がただ単に英語を流暢に話せるということだけでは満足されませんでした。英語の力をつけるだけではなく、歴史や文学、それに文化なども勉強する必要があると、先生は強調されました。愛読書である、Buberの“I & Thou”即ち、“我と汝”の講義の時、野口先生はいつもこう話されました。「Human relationshipというのは“I”だけで成り立つものではない、“Thou”があってはじめて、“I”が円満な人間になれるのである。“I”が相手にするのは壁でも建物でもなく人間なのである。」

ここで、もうひとりの先生を思い出します。Father Forbesです。Father Forbesは、皆さんよくご存じのように、学生たちに基礎英語を教えることにその全生涯を捧げられましたが、講義の時いつも、「トーマス・モアのような“A man for all seasons”になるためには、LogicやPhilosophy、Ethics それに Religionを学ばなくてはならない」と繰り返しておられました。

英語学科の卒業生で、在学中、一生懸命勉強した人も、そうでなかった人も、クラブ活動にだけ熱心だった人も、すべての人が2人の先生のこの精神を深く心に刻んでいることと思います。

我々は又、小稲先生や中野先生、そして岸村先生の、英語学科への長年にわたる献身的な御努力を忘れることができません。そして、現在、学生の教育にあたってくださっている他の多くの先生方にも心から感謝を申し上げたいと思います。これからも引続き、明日の日本のLeaderとなるべき若い人たちの教育に、御尽力くださいますようお願い申し上げます。

さて、本日は、英語学科のOB会が正式に発足する日でもあります。これは私たちがずっと待ち望んでいたことであります。

普通、私たちが大学を考える時、まず先生、学生、そして例えば我々の素晴らしい New Library のような施設を思い浮かべます。しかし、私が考える大学のもうひとつの大切な部分とは“Alumni”即ち卒業生であります。我々は、大学で学生たちにいつもこう言っています。「大学での勉強は4年間で終わるのではない。卒業後も社会のいろいろな活動の場において、上智で得た“Lux Veritatis”即ち真理の光を放つように」と。これは又、上智大学卒業生の義務でもあります。

ところで、私は最近、上智大学史という本の第2巻を読んでいます。偶然、上智の名前の由来についての面白い記事に出会いました。大学の名前を決める時のこと、最初、“上智恵大学林”(じょうちえだいがくりん)はどうかと考えられたこともあるらしいのです。それは、最高の学問と智恵の林という意味です。これがラテン語に翻訳されて Sapiencia となり、ギリシャ語では“Sophia”となるわけです。“上智大学”という名前が選ばれるまでにはいろいろな意見があり、混乱もあったようです。仏教大学のような Joushi つまり女子大学のようにも聞こえる等々。．．． もっとも、女子が入学を許されるまでには随分長い時間がかかりましたが、．．． 今は勿論、上智は有名になりましたから仏教大学などと言われることはなくなりました。

話がそれましたが、さて、4年間をかけて我々が学生に与える最高の智恵つまり Sophia とはどのようなものでしょうか？ 今日、社会の傾向として、me-first即ち自分本位の考えがはびこっています。先程、野口先生のところで述べた“I and Thou”のrelationshipの

Thouの部分はなくして、ただ“I”だけになっているようです。“I”Philosophyばかりになった結果、第二次世界大戦時には、ナチスによってユダヤ人がガス室に送りこまれ、又、広島、長崎には原爆が落とされるような悲劇が起こったのだと思います。今もなお、アフガニスタン難民の問題、レバノンやアイルランドでのテロなど様々な悲しい問題が起こっています。これらはすべて、“I”philosophy の招いた結果だと思います。

しかし、“Sophia”の精神はこうしたことは全く反対でなければなりません。本当の知恵とは、人間性を疎外して機械やComputerのように働くことでもなく、他人を犠牲にして自分の利益をはかることでもないのです。

皆さん、Dickens の“Christmas Carol”をおぼえているでしょう。あの中でScrooge は、お金と商売だけに心を奪われていました。亡くなったMarleyさんの幽霊が出てきて悲しげにScrooge にこう言います。．．．「Business. Mankind was my business.．．． みんなを幸福にするのが私の仕事だったはずなのに。．．． なぜ、私は友人たちの中でも目を伏せて歩いていたのだろうか、そして、なぜ私はその“星”を仰ごうとしなかったのだろうか、その星は3人の博士をベツレヘムに導いたのに。．．．」

Sophiaの精神とは、人格の完成した良き人となることです。即ち、他人のために自己を捧げることです。

旧約聖書の格言の書で、Sophia即ち知恵は私たちにこう語りかけます。

我が子よ、私の教えを忘れるな、私の教訓を心にとめよ。
それは、あなたの日を長くし、生命と安楽な年月とをもたらすだろう。
温良さと誠実さとを失うな。
それを首にかけ、心の板にかきしるせ。
知恵を見出した人、分別をもつ人は、さいわいである。
かれがそれをもうけたことは、銀を手に入れたことよりも値打があり、
その収入は、純金よりも高価である。

私は、今日新しく発足するこの英語学科の“Alumni Association”が、ただ名前だけの組織ではなく、実際にこれを通して、先生、学生、そしてAlumniの3者の絆が強められ社会的にも貢献してくれることを望みます。

最後に、私は、上智大学も、英語学科も、そしてAlumniもますます発展していくことを希望し、この次は50周年を迎えることができるように祈っております。

どうもありがとうございました。